別紙様式３

学校運営協議会　会議実施報告書

このことについて、「岐阜県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則」第８条第１項に基づき、次のとおり学校運営協議会を開催しましたので、その概要について報告します。

１　会 議 名　　関特別支援学校　学校運営協議会　（第３回）

２　開催日時　　令和６年２月８日（木）　１０：００～１２：００

３　開催場所　　関特別支援学校　大会議室

４　参加者

会　　長	ダーリンプル・規子	桜花学園大学保育学部教授
副 会 長	澤井　基光	岐阜県民生委員児童委員協議会会長
委　　員	梅村　美紀	Man to Man Animo 株式会社マネージャー（欠席）
	清水　惠子	各務原市福祉の里所長
	高木　　哲	岐阜県立ひまわりの丘第一学園次長
	深見　大輔	同窓会会長
	丸山　香枝	ＰＴＡ会長
	水野　友有	中部学院大学人間福祉学部准教授
	森藤　由幸	関市民生委員
	吉田　純也	株式会社Ｆデザイナーズ代表取締役
学 校 側	渡辺　政幸	校長
	井原　　誠	教頭
	佐橋　朋子	事務部長
	上村　　篤	小学部主事（欠席）
	飯田　直樹	中学部主事
	髙橋こう子	高等部主事
	則竹　裕子	教務主任

５　会議の概要（協議事項）

（１）学校評価アンケートについて

・保護者アンケート、生徒アンケート、学校運営協議会委員アンケートの結果と分析について説明する。

意見１：保護者アンケートの「自己評価をわかりやすく伝えている」の項目に「わからない」が多かった。よい教育活動をしていても、どう伝えるかが問われる。学校の伝え方でわかる人とわからない人がいる。全体的に見ると、今まで以上に伝わっていることはわかった。生徒アンケートはとても大切で、一人でも否定的な評価をしていることは寂しい。教職員が生徒のことをわかろうとしている姿勢は必ず伝わる。担任が生徒のことをわかりたいと伝えることも大切。

意見２：アンケートは見える化されていてよい。「わからない」がまだ多いのが気になる。「わからない」があることは伝わっていないということ。また、生徒のアンケートで進路について否定的な評価があった。進路に対して不安を感じていることが気になった。

意見３：全体的によい結果である。ただ、少ない人数でも生徒に否定的な意見がある。教職員と生徒が合わないことはあるが、その中でどのような対応をするかが大切。担任と合わないなら、副担任や他の教職員と相談できるとよい。また、障がいが重度の生徒ほ

ど地域とのかかわりが少ない現状がある。地域でもう少しかかわりがもてるようになるとよい。

意見４：前年度の比較では、高くなっている。評価の仕方はよい。アンケート項目にない意見を自由に記入できるようにするとよい。

意見５：教職員の尽力により高くなっている。やっているのにうまく伝わらず、評価されないこともある。やっていることが伝わると、教職員のモチベーションにつながる。

意見６：アンケートに答えることができない重複障がい学級の児童生徒には担任が思いを汲み取ってほしい。意見が言えない保護者もいるので、自由記述があるとよい。

意見７：母数が少ないので、割合を気にしてはいけない。「１」は数ではなく、一人の人生、思いである。児童生徒数が２０人程度に減少したとき、アンケートという手段がよいのか。意思を表出しにくい児童生徒のかすかな内面を読み取って、それを可視化していく方法を考えていく必要がある。

意見８：地域の人からは関特別支援学校の校舎は見えない。地域では知らない人が多いと思う。向山団地の自治会で南ヶ丘小学校の「学校だより」が配付されている。「学校だより」を配付することを検討してはどうか。

意見９：全体を通して肯定的な評価が多い。評価をして改善するというサイクルがうまくとれている。アンケート結果に数字が多いので、結果を見やすく、分かりやすくするとよい。また、項目ごとの評価に対して改善していくことが明記されるとよい。

（２）作業製品価格について

・作業製品の価格設定の手順について説明。

意見１：市場価格では、材料費の３倍で価格設定をしている。できたものをそのまま出品する場合は２０％をのせて値段を付ける。付加価値を付ける場合もある。

意見２：原材料に対して製品はいくつできるのか。クリップマグネットと花皿が同じ価格だが、クリップ代に粘土代を合わせた価格設定になっているのか。

⇒数量については今すぐ回答できない。クリップマグネットは粘土の部分が少ないので、クリップ代を含めても、花皿と同じ価格になる。

⇒今後、原材料費をもとに細かく価格設定を行っていきたい。

（３）校内自校反省について

・スライドを通して各学部。分掌の成果と課題を説明する。

意見１：成果と課題がはっきりとわかってよかった。授業参観ができたので、それに肉付けしてイメージがもちやすかった。高等部の成果で、進路について「保護者と連携できた」とあったが、アンケート結果との齟齬がある。その違いがどこにあるのかを見ていく必要がある。令和７年度に児童生徒が減少していくことをネガティブにとらえなくてよい。地域で子どもを育んでいくことが大切。

意見２：特別支援学校と一般の学校は違うので、児童生徒減少はネガティブではない。令和７年度は大きな節目になるという共通認識をもって話し合いたい。寄宿舎や家庭への影響が出てくるが、大人の都合で児童生徒の不利益にならないようにしないといけない。

意見３：地域との交流をどのように行っているかを知りたい。学校にいる間はつながりがある。卒業後の地域での居場所を考えていく必要がある。障がいがあっても地域との交流があり、地域に居場所があるとよい。特別支援学校は卒業生にとって大きな存在である。卒業して何年たっても学校を大切に思っている卒業生の居場所のことも考えてあげたい。

意見４：今でも一人学級の児童生徒がオンラインで別の学校とつながる取組をしている。令和７年度に人数が減少するからマイナスになるのではなく、いろいろな工夫があるといい。単元シートや校務支援システムなどは教職員の働き方を軽減できる。寄宿舎については、

舎生が一人になっても家庭の支援が行えるとよい。通学困難な方が対象になるということだが、保護者支援もあってよいのではないか。

意見５：生徒減少にともない教職員が減少しても、教育活動の中身は同じか、それ以上のことをしないといけないので、教職員のたいへんさを感じる。学園生はスクールバスに乗って、元気に学校に登校していく。教職員や友達が待っているので、足取りもスムーズである。学校と学園とタテ・ヨコの連携をして共に頑張っていきたい。

意見６：毎年大阪に行って訓練を行っている。大阪に住んでいる脳性まひの子はうらやましいと思っていたが、大阪の病院のＳＴに、学校での食形態のことを話すと驚いていた。大阪の学校ではそこまできていないという。給食試食会などを通しても学校の給食はすばらしいと思った。給食、二次調理、摂食指導は学校の強みになる。

意見７：中部学院大学と関特別支援学校の一人一人が同世代の仲間としてつながり、それぞれのもっている強みを出し合いながら対等なかたちで新しいものをつくっていけるとよい。このエリアをベースに「関桐ヶ丘芸術祭」が１０月、１１月に行われる。その場を活用して、地域の人や大学教員にこの学校を見ていただきたい。

意見８：令和７年度以降、建物の維持管理もたいへんになるが、地域のボランティアを活用したり、雇用の場にしたりできるといい。医療的ケア児の保護者は学校に行っている間は、バラ色の６年間、９年間と言われる。その間に、自分の時間がもて、活動できる。卒業して子どもが家に戻ってくると、自分の時間を子どもに捧げないといけない。卒業後の進路、居場所づくり、保護者支援など学校としてできることを考えてほしい。

意見９：個々に合わせた教材やＩＣＴ機器が活用されている。ただ、教職員が新しいツールを活用すればするほど学校と事業所とのギャップが生まれてくる。事業所には予算の関係など限界がある。事業所の職員と教職員との交流や見学ができるとよい。卒業後も学校に近い状況で生活ができるとよい。

（５）会長挨拶

協議会のメンバー一人一人から、自分たちの生活にもとづいた具体的なアイデアが出ていた。それに取り組むことでいろいろなことが見えてくる。今、インクルーシブ社会を世界中が求めている。ソプラノ歌手の岡本知高さんは子どもの頃、足の病気で特別支援学校に入っていた。まわりの人からはたいへんだと思われていたが、中に入ってみるとどんな障がいの子もそれぞれの自我があり、お互いが支え合って、自然なコミュニティがあった。人と違うことは自然なことだったと話されていた。インクルーシブの理念をどうやって具体的に生活の中にしみ込ませていくかが大切になる。

６　会議のまとめ

学校評価アンケートについては、たとえ一人でも否定的な評価がある場合は、それについてよく検討する必要があるという指摘を受けた。また、アンケートに自由記述欄を設けたり、アンケート結果をわかりやすく保護者に掲示したりするなど、アンケートの取り方や活用法についても改善点が明らかになった。

校内自校反省については、多様な視点から学校の取組や学校課題への意見を得た。児童生徒数の減少も、ネガティブに考えることはなく、工夫次第で児童生徒のかかわりを広げ、地域とのつながりをつくることができるという前向きな意見を得た。インクルーシブ社会をつくるという広い視点から学校の役割を考えることができた。